

12 雲潤の里 4.0キロメートル



- ① 雲潤の里……………239
- ② 宮大工名匠の里……………241
- ③ 青嶺山奥山寺……………242
- ④ ゲニさん……………245
- ⑤ 田谷の盆踊り……………248
- ⑥ お頭(お禱)……………249
- ⑦ 大歳神社のイボ取り水……………253
- ⑧ 五郎兵衛屋敷……………254
- ⑨ 馬渡谷城と石打八幡……………254
- ⑩ 八王子神社の由来……………256
- ⑪ 田谷村の勇さん……………257
- ⑫ 城山と天下溝……………259
- ⑬ クロヨミさんの話……………260

・奥山寺多宝塔（市指定文化財）

奥山寺は白雉元年（六五〇）に法道仙人が開いたと伝えられています。

多宝塔は宝永六年（一七〇九）の再建で保存もよく姿も美しく郷土の大工村神田作左衛門の作になるものです。

・八王子神社

後朱雀帝の長暦元年（一〇三七）創祀と伝える。この地に疫病、天災が続き、代表二十一人が妖鬼退散、五穀豊穰を祈願したところ天より朝霧の中から白幣が降り、「八王子大神なり、この地を守護する」との声があったという。

当神社には、時の領主八木丹波守が嘉永年間に奉納したという金幣や赤松政則の奉納したという名刀が社宝として伝えられている。

社殿は元禄年間に改修したものであるが、材料は大部分ケヤキで氏子で大工町の宮大工による細密な彫刻がほどこされている。

また、神社裏手小丘に竪穴式古墳が七基あり、これらから出土した土器が保存されている。

雲潤うずいの里さと（油谷町付近）

雲潤うずいの里（加西市油谷町あたり）と法太ほうたの里（西脇市水尾町あたり）は、一つの山の南と北にある村です。大昔のこと、この二つの村は、水不足になやまされていきました。村人たちがいっしょけんめいに田植をしても、育たずに枯れてしまうことがたびたびでした。

「かわいそうに、何とかしてやらねば、村の人たちは死んでしまうかも知れない」

法太の里をおさめていた丹津日子にっひこの神は、いろいろ考えたあげく、おく山のふところから水を引いてくることに決めました。そして、同じことなら南の村へも送ってやったらよろこぶだろうと、相談に出かけました。あつい日ざかりの山道をやつとのことと越え、南の山のすそまでたどりつきました。この村の田も水がたりのないので、稲が枯れかけています。ところが雲潤の里のあるじの太水おみづの神は、すずしい木かげで昼寝をしていました。丹津日子はそののんきさにあきれながら、声をかけました。

「もし、太水さん。村人たちが水に困っているのです、川を掘ろうと思いますか……」

「ああ、それはけっこうな話ですね。ごくろうさん」

太水の神は起きあがりもせず、だるそうに答えました。

「あなたの村へも引きませんか。いっしょにがんばりましょうよ」

「いや、わしの村はけっこう。あなたひとりやって下さい」

あいかわらずほおづえをついたままです。丹津日子は、そのように腹がたって来ました。

「しかし、あなたの村の人びとも、水に困っているじゃありませんか」

「いざとなれば、わたしにはとっておきの方法があるのですよ。丹津日子さん。ごしんせつは感謝しますが…」

「そんな方法があるのですか、この日照りに。水はすっかり干あがってしまったているのですよ」

「方法というのはね、この山にいるイノシシを殺し、血をわけてやるんですよ。水のかわりに」

「あなたは川を掘るのがめんどうだから、そんなことをいうんですね。いや、それにちがいない」

丹津日子は、カンカンにおこって帰ってしまいました。

そのころは、なまけることを「うみ」（倦む）といいました。それで、太水の神が住んでいた村を雲潤うづみの里と呼び、だんだんなままって「うずみ」の里、「うずに」の里となりました。今の宇仁うにの地名はこれからきた名前だということです。

また、丹津日子の神のおかげで、法太の里は野間川がゆたかに村をうるおしていますが、雲潤の里の人たちは、ため池をつくったり、井戸水を汲み上げるなど、苦勞をしなければなりませんでした。

（兵庫県学校厚生会「郷土の民話」東播編）

宮大工名匠の里（大工町）

大工町は、名の通り、大工職人の里として非常に有名なところです。

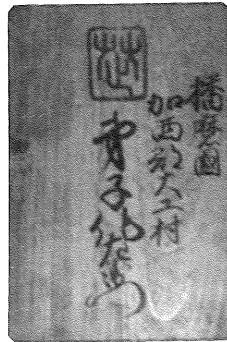
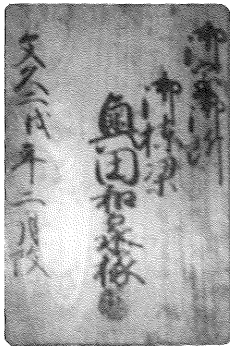
その昔、京都に都があったころ、宮中に出入りを許されていた大工の棟梁（ちゅうりょう）飛弾（ひだ）の名匠（めいしやう）だったと聞いています）が、その頃、雲潤の里と呼ばれていたこの地に、身を寄せて来

ました。その名工は、この土地で自分の技術を子孫に伝えたのです。その技は次第に全村におよび、多数の大工が生まれることになりました。

京都で御所（ごうすい）のご造営（ぞうえい）がおこなわれた時、この村から六十五人もの大工さんが、京の都に出てその建築にたずさわりました。

宮中に出入りを許されたしるしの木札が、今も残っています。この頃には大工の村は大変栄えていて、戸数も六十戸にも達していたといわれています。

大工村の職人たちは、特に社寺建築の技術に長じておりましたので、各地のお寺や神社は、この村の大工さんが建てておられます。中でも、この村から丹波を経て京都に通じる沿道の神社・寺院は、この村の職人に



よるものが多いのです。加西市でも酒見寺や奥山寺の多宝塔などは、大工村の職人の建築によるもので、その技術の高さをうかがい知ることができます。

大工町には、三百年以上を経た今も、この技術が生きており、すばらしい彫刻をほどこした社寺が各地につくられています。

ちなみに、大工町の「神田」という名字は、当時宮中よりさずかったものだとおっしゃる方がおられますし、この村にあるお宮の敷地には、以前一反歩（十アール）にもおよぶ広さの前方後円墳があって、これは飛弾の名匠の墓であるといいつたえています。

（神田勲氏・神田利一氏の話より）

青嶺山奥山寺おくさんじ（国正町）

昔、恵便法師が仏教を広めるために、高麗（朝鮮）の国からはるばる日本に渡って来りました。

しかし、当時の人たちは、まだまだその教えを理解しませんでした。法師はこれは自分がいたらないためであると考えて、国正のこの谷に入って修行をいたしました。そして自分で聖徳太子の像を刻み、これを安



置しました。

その後、法道仙人がインドから飛来して、法華山一乗寺などを開きましたが、この法道仙人が紫雲に乗って青野を通った時のことです。北方の嶺に瑞雲（めでたい雲）がたなびいているのが見えました。不思議に思っこの谷に入ったところ、大きな松の木の下に小さなお堂があり、中に聖徳太子の像がまつてあるのを見つけました。法道仙人はたいへん喜んで、この像をおがんでおりますと、どこからともなく一人の老人が現われて、「もしここにお寺を建てて、この像をおまつりすれば、あなたはみんなから慕われる人になれるでしょう。わたしが必ずみんなを守ってあげましょう」といって、そのまま北斗七星に化身して西谷（富尾谷）に入ってしまった。

法道仙人は、早速この地に伽藍がらんを建て、青嶺山奥山寺と名づけました。そして十一面観音像を彫刻しました。不思議なことにこの像は夜毎に光を放ち、その光はあたかも稲妻いなずまのようであったといひます。里人たちは、この像を電光菩薩と呼びました。

その後、この奥山寺は、大宝三年（七〇三）に火災にあいました。

嘆き悲しんでいるお坊さんの耳に、東の方から人の呼び声が聞こえて来ました。見ると、はるか東の溪谷に四人の白髪しろがみの老人が立っていて、しきりにまねいているのです。その姿を追って溪谷に入って行きますと、四人の姿はどこにもみつきりませんでした。岩上に焼けてしまったはずの太子像が立っているではありませんか。

お坊さんは、これこそ四天王の加護かごであり、白髪の老人は四天王の化身であったのかと、たいそう喜んで、早速この溪谷にお堂を建て、この太子像を安置あんちして頂法寺ちようほうじと名づけました。（頂法寺という地名は、現在も奥山寺の東方約五百メートルの所に残っております）

奥山寺は、その後荒れはてたままになっておりましたが、養老二年（七一八）に、行基という僧が再建して、頂法寺の太子像を移しました。

ところが、慶長六年（一六〇一）七月六日、再び火災にあってしまったのです。この時、北の坊に長泉という身の丈七尺（二メートル）もある怪力の僧がいて、猛火の中に飛び込み、十一面観音像を取り出したといます。慶長十二年に本堂は再建されましたが、その後のたみがげしくなり、貞亨三年（一六八六）僧隆俊がこれを修理しました。隆俊は村人に頼み修理に使う良い木材を探しました。数里も山奥に立派な木があるのを見つけて、さっそくこれを伐り運ぼうとしましたが、余りにも大きすぎたため人力ではとうてい運

び出すことができません。人々は思案にくれてしまいました。みんながどうすることも出来ずあきらめかけていた時、僧隆俊は車を造って引き出すことを提案しました。みんなはいくら車に乗せたところでこんな大木を運び出すことはとうてい無理だと思いましたが、とにかく乗せて見ることにしました。やっこの思いで車に乗せたみんなが、やれやれと一息ついた時、不思議にも車がひとりでに動き出し、あれよあれよという間に山を下り谷を渡って自力で奥山寺についでしまったということです。村人たちは総出で、この木を使って本堂を立派に修理いたしました。

(加西郡誌より)

ゲニさん (田谷町)

江戸にまだ將軍しょうぐんさんがおられた頃のことです。

田谷の若者たちは、冬の間、丹波の山奥へ木びきにやとわれて行っていました。

十二月からあくる年の三月にかけて、四ヶ月も山奥に小屋をかけて、大勢の若者たちが暮らしていたのですから、いろいろな不思議なことが起こったそうです。このお話も、そのうちの一つです。

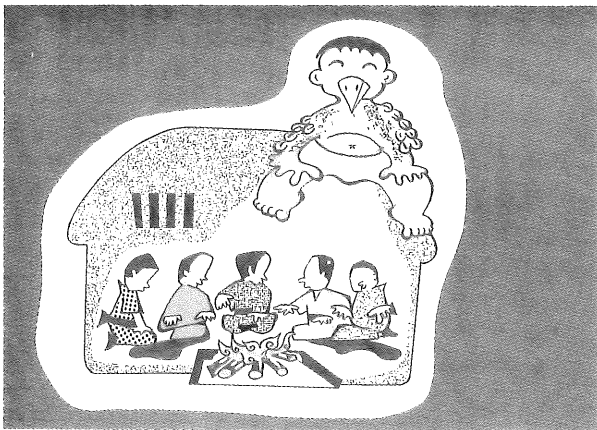
木びきたちの小屋の外で、夜になるときまって、「ホー・ホー」という呼び声が聞こえてくるのです。フクロウの声かと思うと、そうでもなく、もつとずっしりと重く、背すじが寒くなるような声なのです。

おそろしいことには、もし誰かが、その声のまねをして「ホー・ホー」とやると、その人は何かにつかれたように、戸を開けて外へ出て行き、そのまま帰って来ず、まるで神かくしにでもあったように、行方不明になってしまいました。それも、外の声にあわせて、「ホー・ホー」といい続けていると何も起こらず、疲れてやめると、夢遊病者のようになって、外へつれ出されてしまうのです。

年寄りたちの話によると、それは「グニさん」の声なのだそうです。グニさんは自尊心が非常に強く、自分のまねをするやつには、ばかにされたと思って腹を立て、さらっていくということです。

「ひとつ、みんなでグニさんをからかってやろうやないか」

ある晩、若者たちはたいくつしのぎに相談しました。呼び声の順番をきめて待ちかまえていると、いつものように、森の奥から「ホー・ホー」という声が聞こえはじめました。さっそく「ホー・ホー」と呼びかけ



ますと、その声はだんだん小屋に近づいてきて、とうとう屋根の上で聞こえるようになりました。

はじめはからかうつもりだったものの、さすがにこわくなって来ましたが、やめるわけにはいきません。小屋の中では七人の若者が交替こうたいで、必死に「ホー・ホー」と呼び続けました。

やっと夜明けを迎えました。東の空が白みはじめるにつれて、外の声がだんだんかすれて来て、しまいに、バツタリ聞こえなくなりました。

すっかり夜が明けましたので、おそろおそろ外へ出てみますと、どうでしょう、小屋のまわりにはおびただしい血が流れ、その血が山の奥へと続いているではありませんか。

そこで、みんなはそろって血の後をたどって行きました。血は山奥のある大木のところでとぎれ、そこには、体は人間でくちばしがあり、手に羽根の生えた怪物が倒れていたということです。それがグニさんの正体だったのです。

その年から後は、もう「ホー・ホー」と言う声は、全く聞こえなくなりました。

(兵庫県学校厚生会「郷土の民話」東播編)

田谷の盆踊り（田谷町）

旧暦七月十五日、田谷の人たちは老いも若きも村中の者が阿弥陀堂に集まって、にぎやかに盆踊りをした。音頭取りは、声に自慢の者があたり、阿弥陀堂の庭に設けられた音頭場に登って、太鼓の拍子で節まわしよく、声はり上げて、日頃の練習ぶりをほこらしげにうたいあげた。村の人たちは、音頭場をかこんで円形に踊りの輪をつくった。

田谷の人たちは、年に一度のこの盆踊りを何よりも楽しみにしていたという。音頭も年々新作し、踊りも新たな手振りをおみだして変化をつけたので、その動作の軽妙さは他に及ぶものはなく、「田谷の盆踊り」として、知らない者はないほどであった。音頭取りと踊り手の村の青年男女は、遠くの村々からもまねかれるようになり、その評判はたいそう高かったという。

しかし昭和に入って、戦争がはげしくなるにつれて、風俗上の取り締りもきびしくなり、だんだんすたれていってしまった。

（加西郡誌より）

お頭とう（お禱）（田谷町）

「ながながのご精進しょうじんごくろうさんでした。立派にお頭渡しができまして、ほんとうにおめでとうございます」

人家のある所から南へ、田の中をくねくねと曲った細い参道が、山すそのシイやカシ林の中の田谷町大歳神社へと続いている。

一月二十六日（以前は毎年一月二十八日に決まっていたが、今は一月の第四日曜日になっている）朝、この参道を村人たちが三々五々つれだってお参りしてくる。拝殿の前にはモーニング姿の正装せいさうに威儀いぎを正した二人の頭人が、参拝して来た村の人たちの挨拶を受けながら、

「有難いおとっさんのごくさんです。どうかいただいて下さい」

と、餅やセンベイ・ミカンを両手に持ちきれないほど、おとなはもちろん幼児にいたるまで、参拝者全員に次々と手渡している。子どもたちの中には、できるだけたくさんもらおうと、大きな袋を用意して来ているチャッカリ組もある。

拝殿前の広場には、太い丸木が四角に組まれ、大きなかがり火がたかかれていて、みんなはこの火のまわりに集まって思い思いに談笑しながら、お頭渡しの式のはじまるのを待っている。子どもたちは早速、ごくの

餅をかがり火で焼いて、普段は餅など余り食べないのに、この日ばかりはうまそうに真黒こげになった餅をほうばっている。

この大歳神社のお頭は、田谷町を南北に二分し、双方の各戸から年齢順に、毎年一名の長男を出して頭人とする習わしである。

頭人になると、頭渡しの翌日から宮掃除など一年間にわたり大歳神社の神事いっさいを執行していく。一のつく日と六のつく日に定期的にお参りして宮掃除をする宮守りなど、なかなかきびしい精進が要求される。冬期、まだ夜の明けきらない早朝、凍てついた参道の霜柱を踏んでお参りする拝殿の拭き掃除は、拭いた板間がすぐに凍りつくことも度々であるし、境内の掃き掃除も、秋の落ち葉の頃は、枯れ葉が次々に舞い下りて来て全く大変である。

頭人は一年間身の清浄を保ち、不浄な行為を慎むようにいましめられる。例えば葬式には一切参列を許されないし、従って服喪中は絶対にお宮に近づけない。また、村に何か変事が起きると、頭人の精進の足りないせいとみなされる恐れもある。昔は様々な禁忌が課せられていたようだが、時代とともにだんだん緩和されてきた。

しかし、このお頭受けをすませることによって、一人前の戸主としての資格を自他共に認められるという

意味は、今も生き続けているわけで、一年間の精進は、その自覚を深める上に大きな意義を持つように思われる。

神事の中では、何といってもお頭渡しのある「おとっさんの祭り」は、一番大切な神事である。数日前には、御供えと参拝者にくばるための餅つきをする。一人一斗、合わせて二斗の餅をつき、鏡餅、小餅をつくる。出来た小餅は、わらで編んだ俵を半分に切ったものの中にひのみ松の葉をしいて入れる。前日には、宮の外をきれいに掃き清め、幕を張り、幡を立てて「祭」の準備をととのえる。にしめ、巻ずし等の料理を作り、神事のための膳をつくるのも役目である。当日には朝早くから近所や親類の手助けを得て、必要なものを神社に運び込み、神供を献上して神事、宴の準備をするのである。

「ただ今から、お頭渡しの神事をはじめます」

という、区長さんの声を合図に、人々は拝殿に上がり、区長・頭人二人・新頭人二人が前座について神主のお祓いを受ける。お頭渡しの旨の報告をして、田谷町の繁栄と五穀豊穰、各戸の家内安全を祈願する祝詞のりとが読み上げられる。

昼近くなつて神事が終わると、酒宴が初まる。お神酒がくみかわされると、かしこまっていた儀式の座がにわかにはぐれ、なごやかな空気がみなぎってくる。世間話の中に、人々の和が生まれていき、連帯感が培

われていく。神の下に村は一つだという思いが、こみ上げてくるようである。

つい最近までは、お頭渡しがすむと、近所や親類縁者をまねいて、婚礼の時以上の酒・さかなをふるまい、翌朝まで夜を徹して飲み続けるという習慣があったが、これは改められた。

解説

「お当^ち」（頭・禱）とは、近畿以西にひろがっているその土地の習慣を残した氏神を祀る組織である。

市内でも河内町の鎌倉禱・野上の大歳当・繁昌の川西当・桑原田の大歳当・中野の稻荷神社当など、特色のあるものが多い。

桑原田のお当は、振舞^{よまほ}（会食）に里芋が用いられるので「小芋当」とよばれる。繁昌町川西のお当は「餅講」とも言い、当屋^{どうや}が各種の餅を大量に作って、戸主だけでなく全家族に接待する。中野のお禱^ちは、禱人五人ずつの一八組でおこなわれるが、この組合せを「お禱兄弟」とよび、神事つとめの間は言うまでもなく、日常生活においても実の兄弟以上に協力しあう義務をもっている。

大歳神社のイボ取り水（田谷町）

田谷町の大歳神社の井戸から湧き出る清水が「イボ」に非常によくきくのです。

神社の右手奥の川ぞいにあるこの小さな井戸は、今まで、どんなに日照りが続いても涸れたことがありません。この神社の宮水として大切な水なのです。

不思議なことに、この水をいただいでつけると、どんながん固なイボもたちどころになおってしまうのです。

イボで困っている人が、このお宮にお参りして願をかけ、井戸水をもらって帰ってイボにつけると、短期間にうそのように消えてしまいます。

昔からどんなにか多くの人たちが、この神水のおかげを受けたか知れません。その証拠に、このお宮にはお礼に上げられた「タコの絵馬」がぎっしりとかかげられています。



五郎兵衛屋敷（馬渡谷町）

馬渡谷の村内に、五郎兵衛屋敷とよぶ田がある。屋敷あとらしいが、この田を売買するとたたりがあると伝える。質などに入れ、利息として年貢を持って行くと、先方へもたたったという。夢の中に女官姿の亡霊があらわれ、うらみごとをのべるらしい。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）

馬渡谷城と石打八幡（馬渡谷町）

馬渡谷町の氏神さんは、石打八幡社で誉田別命（応神天皇）と素盞鳴命をおまつりしています。ご神体が柚子の木の生えた岩とかで「柚の木八幡」ともいわれています。

この八幡さんの裏山に、戦国時代に土豪内藤氏のいた馬渡谷山城があります。内藤家の先祖の盛貞が、足利尊氏の命で常陸国からこの地に来住したときに始まるといえます。

子孫の盛勝が鶴岡八幡宮に参籠し、満願の日にかぶとの中に一石を得て、これをふところにして戦い、所々

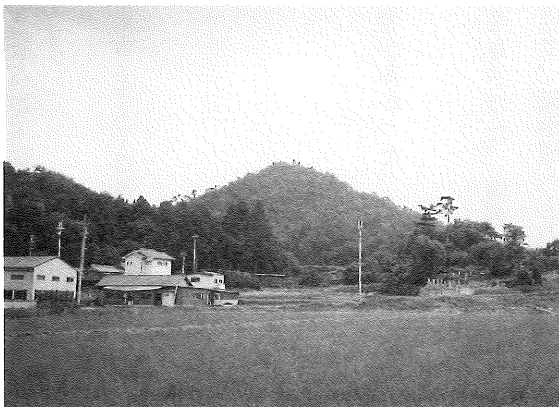
の合戦に手柄をたてました。石打八幡のご神体はこの石だともいわれています。のちに、内藤氏が満久城に移ったとき城内に分祀し、いまでも山麓に鎮座しています。

境内に「マカラフツタン」とよばれる石が七個すわっています。ふつうの山石ですが、村ではこれを先祖石としてまつています。石打八幡には、祭祀組織として宮座があり、七つの頭株がありました。大西・遠藤・内藤・岡本・北川・中植・千都（今はない）の七姓で、順次お頭役をつとめています。

七個の石と七頭株、この七姓が馬渡谷村の草わけ百姓で、「マカラフツタン」はそれを象徴するものではなからうかと思われま

す。この八幡社の祭りは、当地方では稀な季節の二月十一日前後に行われますが、前掲の内藤氏の先祖の盛親が文和三年（一三五四）二月四日、摂津の神南山合戦で功をたてたのに関連するとかいわれていますが、むしろこれは、いつの頃からか厄神さんを合祀したためであろうと考えられます。

礼祭当日は、内藤家から参列する慣例があり、供物は「お姿餅」と称して、切りばなしで石の形になぞられた餅をつくりま



木の供御膳を三かさね、七膳ととのえます。いずれも「マカラフツタン」とよばれる先祖石にあやかると思われます。

(加西タイムス「文化散策」(吉田省三氏文)・中植修氏提供資料より)

八王子神社の由来(油谷町)

長暦(一〇三七)の頃、この地に天変地異(てんぺんちい)が続き、疫病がはやって死ぬ者が多かった。また、害虫が発生して穀物はほとんど実らなかった。

このとき二十一人の者が大歳神社(田谷町)の社前で七日七夜のいのりをささげた。満願(あかつき)の暁、東の空がようやく白らむ頃、朝霧たなびく中を白い御幣(ごへい)が矢を射るようにとんできて、鏡が原へとくだった。人々がそこへかけつげると、二十一本の御幣が並び立っていた。

ときに空中から声が聞こえ、次のようなご神託がくだされた。

「わたしは八王子の神である。この原へ鎮座(ちんざ)して妖魔をしりぞけ、五穀を守ろう。」

大いによるこんだ二十一人は、村人たちと相談して社殿を建て、氏神とあがめまつたと伝える。

また、二十一人は講人こうじんとよばれ、代々この神社のまつりごとをつかさどってきた。

(北播磨の伝説・吉田省三氏編著より)

田谷村の勇ゆうさん (田谷町)

「勇さん、お江戸の話きかしてえな。」

「よしよし、花のお江戸はなァ……。」

竹細工の手を休めて、ニコニコと語りはじめる。子供たちと勇さんの日課がはじまった。話しながらいつか勇さんの眼は、遠い江戸の、そして遠い昔のまぼろしを追うかのようにとじられた。近藤勇蔵。穂積(現滝野町穂積)に陣屋のあった八木但馬守(旗本・四千石)の軽い家来(足軽)だった。殿さまのお供で、何度か江戸の土をふんでいた。幕府がつぶれ、武士がなくなると同時に、この田谷村で百姓となったのである。妻子もなく、わずかの畑とホウキやガンジキを作って、やっと暮らしていた。

大のお人好しで子供ずき。ただ一つの楽しみといえば、小さな家に集まってくる子供たちにお話をするこどだった。なにしろ、村でたった一人のお江戸を見た男である。子供たちは、毎日のように同じ話を聞きな



がら、満足して帰っていった。

「……そしたら、関所のお役人が言いよった。おい、名をなれ。わしは答えてやった。こんどゆーど。なに、もういっぺん言うてみい。コンドューゾー。お役人はかんかんに怒って、つかまえようとしたんや。そこで、わしが関所手形（通行証）をひょいと出す。手形にはちゃんと、「八木但馬守家来近藤勇蔵」と書いてある。役人は目を白黒させながら、よし通れとくるんや。」

子供たちはワツとかん声をあげ、勇さんの頭にチョコンとのったまっ白いちゃんまげを、尊いものであるかのように見つめるのであった。

明治四年に断髪令が發布され、ちゃんまげは禁止となった。しかし、勇さんはぜったいにまげを切らなかつた。ちゃんまげこそ、彼と江戸をつなぐただ一つのかたみであり、また子供たちのための、清らかな

夢でもあったのだ。そのため、巡査にしかられることもたびたびだった。ガンジキの束をかついで北条の町へ売りに行くと、古坂のトンネルでつかまった。

「こら、そのちゃんまげ男。きさまはだれだ。名をなれー。」

「こんどーゆーぞー。」

「ああ、田谷の勇さんかア。よし通れ。だがな、ちょんまげだけは切るのだぞ。」

明治の中頃、勇さんは山のそばの家でひっそりと死んだ。だれにもみとられずに……。そして、子供たちからも、花のお江戸の夢がすっかり消えてしまった。

(北播磨の伝説・吉田省三氏編著より)

城山と天下溝(青野町)

青野町の北の丘陵地の一番高い山を城山といっています。昔の砦跡とりでせきがあり、土の中から炭になった米つぶが出ていました。現在は、稲荷神社の小さな祠ほらがあり、毎年正月一日には附近の村からおおぜいの人がお参りします。

城山の南面中腹に「駒の爪跡」と呼ばれる岩があります。城山から武士が馬に乗って飛んだ時の馬の蹄跡といわれています。

又、城山の東側山すそに了徳寺池があります。この池は、昔(江戸時代中頃)青野原から加東郡の高岡へ

かけ原野を開発するため、幕府がこの地にあった王後山了徳寺を青野原に移し、谷間の二ヶ所に堤を築き十九平方キロメートルもの大きな了徳寺をつくりました。

そして、この了徳寺池から青野原新田までの約六キロメートルの用水路もつくりました。この用水路を天下(將軍)様の掘られた溝という意味で「天下溝」と呼ばれてきました。

又、この了徳寺池の水源は、青野村の北西の山田村の新条池と、大工村の西谷池の漏り水でした。そこで、山田・大工・馬渡谷・野上・都染の村々を通り、青野のこの了徳寺池まで引く八キロメートルの用水路も同時につくられました。この用水路も「天下溝」と呼ばれていますが、この時の工事は貫流する六ヶ村にまかせたということで「任溝まかせみ」とも呼ばれています。

(岡田正治氏の話・「ふるさとのまち加西誌」から)

クロヨミさんの話(大工町)

江戸時代のこと。毎年、秋の収穫期前になると、領主から派遣された検見けみの役人たちが村々へまわってきた。この役人の胸ひとつでその年の年貢がきまるため、百姓たちは役人のごきげんをとるのに苦労した。当

日は庄屋をはじめ、村中の百姓が道ばたに土下座して迎えたという。

ある年、大工村へ検見役人がやってきた。まだ若いのにいばりかえっている。庄屋のクロヨミ（九郎右衛門）さんは、それを見てムカムカしてきた。「こんな横柄な若僧に、頭など下げられるかい」と思うと、頭が下をむかなかった。形だけつくろっていると、役人はすぐ見とがめた。

「こら庄屋、頭が高い。無礼であるぞ。」

おそれ入るかと思うと、クロヨミさんはシャァシャァとこたえた。

「へい、疝気せんきでなあ。病いにはかてまへん。」疝気とは、下腹部の痛みで腰の筋肉がひきつり、曲げられない病気だそうである。

役人は目を白黒させながら通りすぎたという。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）

